

「意見の述べ方」の教育についての日中比較

—高校国語教科書に着目して—

大野 早苗・莊 巖

1. はじめに

書くことの修得は、単に文法的に正しく整った文を産出できるようになることではなく、自分の属する社会において良いとされる書き方を身に付けることであり、その過程には、学校教育が大きな役割を果たしている。このことについて、たとえば、渡辺(2007: 573)は、初等教育に「基本的な知識や技術だけではなく、所与の社会共同体の成員となるために、それぞれの文化の思考プロセスや表現スタイルを教える、「社会化」という重要な役割」があると指摘し、日本、アメリカ、フランスの小学校における作文教育の方法と、産出される文章の違いについて論じている。

本研究では、日本と中国における「意見の述べ方」の違いを、それぞれの国の中等教育段階に着目して考えたい。日本における日本語学習者の約3分の1が中国出身であることを考えると¹⁾、日中の中等教育に関する研究は、大学等における留学生教育の場をデザインする際の基礎的な資料となる。大野・莊(2016)は、日本に来た中国人留学生が、大学におけるライティング教育の場で、自らが学んできた書き方と日本の書き方の違いに困惑し、不本意に思いつつも日本的な書き方で書こうとする場合があることを報告している。国や文化による書き方や作文教育の差異に関する知識は、無用の混乱を避け、効果的に指導を行うことにつながると期待される。

なお、日本では意見を述べる文章を意見文と呼ぶこともあれば、小論文と呼ぶこともあるが、本稿ではこれらの区別には立ち入らない²⁾。また、中国では、意見を述べる文章は、議論文(议论文)と呼ばれる。中国の議論文と日本の意見文・小論文というカテゴリーのずれについての議論もあるが(前川2020a、肖2021)、本稿は文章のカテゴリーとその名称について論じるものではなく、意見文や小論文、議論文での意見の述べ方に関わる教育について考察するものである。

2. 意見の述べ方の特徴についての先行研究

中等教育段階における意見の述べ方の特徴に関する先行研究を以下にまとめる。

大野(2019)は、日中の大学1年生が中等教育でどのような書き方を学んできたかを知らするために、同じ内容の課題を与えて母語で意見を書かせたものを、主題、主張、論拠、反論という構成要素の配置から比較している。その結果、中国人学生の書いたものの大半が主題—論拠—主張という展開であるのに対し、日本人学生の書いたものは、主

張一論拠一主張という展開が他より多いものの、ばらつきが大きく、様々な書き方が見られること、また、予想される反論を含む展開は、日本人学生の書くものに散見されるが、中国人学生の書くものにはほとんど見られないことを報告している。

前川(2020b)は、日本の高校国語教科書に掲載された小論文と中国の「満点作文」(全国統一大学入試³⁾で高得点を取った作文)とを比較している。これは、模範となる文章の比較になる。前川は、意見と論拠の関係をツリー構造として把握して比較し、小論文ではツリーが多層化するのに対して、議論文ではツリーが多層化せず、意見の陳述と論拠が繰り返されると述べている。また、論拠の内容を見ると、小論文では、現在の出来事が用いられて複数の異なる視点が提示されるのに対し、議論文では論拠として史実や名言・箴言が多用され、同一の趣旨が繰り返されることを指摘している。

肖(2021)は、全国統一大学入試における作文の評価基準をもとに、中国でどのような文章が「良い議論文」とされるかをまとめている。そして、日本の意見文との違いとして、主張が非明示的に述べられたり、「濃厚な感情の文という現れ方」をしたりすること、抒情的な表現が重視されることなどを挙げている。

3. 本研究の目的

先行研究では、学生が身に付けた書き方、模範、評価基準から検討がなされ、文章の構成、論拠の示し方、表現の特徴などの点で、日中の意見の述べ方に差異があることが明らかになっている。では、こうした差異は、どのような教育によって生まれるのだろうか。特に、学校教育において大きな役割を果たす教科書には、何が書かれているのだろうか。

本稿では、日中の高校国語⁴⁾の必修科目の教科書を取り上げて意見の述べ方を学習する箇所を比較し、先行研究で明らかになった意見の述べ方の違いにかかわる点を中心に、どのような違いがあるかを明らかにすることを目的とする。

4. 分析の資料

比較には、2009年告示の学習指導要領に基づく日本の国語必修科目の教科書、2003年発布の課程標準⁵⁾に基づく中国の国語必修科目の教科書を用いることとする。日本では2018年に新しい学習指導要領が告示され、中国では2017年に課程標準が発布されたが、意見の述べ方の日中比較が大学等での教育にも資することに鑑み、まずは、2022年現在、大学等で学ぶ学生の多くが用いた教科書を比較することとした。

日本の国語必修科目である国語総合の教科書としては、占有率等を考慮し、2016年発行の『高等学校 国語総合』(第一学習社)、『精選国語総合』(三省堂)、『精選国語総合』(東京書籍)の3編を選び⁶⁾、その中の表現・言語活動として意見文や小論文が取り上げられている部分を研究の資料とした。

中国の高校国語の必修科目は、必修1から必修5までの5つがあり、1年半弱をかけて履修される。教科書は検定制で、複数、出版されているが、人民教育出版社のものが多数の高校で採用されている。人民教育出版社の教科書は、各巻とも閲読・鑑賞、表

現・交流、整理・探究、名著紹介の4つの部分からなる。作文は表現・交流で学ぶが、議論文を書くことは、必修3から始まる。本研究では、2007年に第2版が発行された人民教育出版社の教科書の必修3から5の表現・交流のうち、議論文を取り扱っている部分を研究の資料とした。

5. 比較と考察

本節では、まず、教科書の概要を示し、その後、文章の構成、論拠・根拠の示し方、表現の特徴に関わると思われるものを取り上げ、比較、考察を行う。

5.1 教科書の概要

表1に日本の、表2に中国の国語教科書からの抜粋・要約を示す。

表1では、日本の3冊の教科書それぞれについて、まず、全体のおおまかな構成と意見文あるいは小論文が取り上げられている箇所についての説明を記載し、それに続いて、当該箇所の見出しとその主な内容、教材として提示される文章等を示した。以下、『高等学校 国語総合』(第一学習社)、『精選国語総合』(三省堂)、『精選国語総合』(東京書籍)を、それぞれ、教科書①、教科書②、教科書③とする。

表1からわかるように、教科書①、③では1回、②では2回、表現の実践・活動として意見の述べ方を学ぶ。それぞれの箇所で、テーマの設定や取材、検討といった意見を述べるための準備や活動、文章構成や書くための注意点などが示されている。

中国の教科書は、各単元が話題の研究、書き方の参考、作文練習の3つに分かれている。表2では、各単元のタイトルを示し、話題の研究と書き方の参考で示される教材(文章、トピック等)と学習内容、作文練習のための材料、テーマ、題に分けて示した。話題の研究と書き方の参考で示される文章については、タイトルが明示される場合はタイトルを、タイトルが不明あるいはない場合は、文章の内容を記した。また、教科書に本文の掲載はないが読むことが勧められている小説等は、「読書推奨」としてタイトルを示した。作文練習は、テーマが示されるもの、題が与えられるもの、考える材料として文章等が与えられるもの、あるいは、それらが組み合わせられたものがある。基本的に、1つのテーマ、題、材料について、1つの文章を書くことが求められており、作文練習の欄に挙げられた項目の数だけ、求められる作文の数があることになる。テーマ、題は、「テーマ：～」「題：～」として示した。それ以外の記述は、教材として与えられる文章等である。組み合わせられたものについては、「テーマ→題」(テーマが示された後、題が与えられる)のように、「→」を用いて示した。

表2からわかるように、中国の教科書では、1つの単元でまとめて意見の述べ方を学ぶのではなく、複数の単元で、順次、必要なことを学んでいく。まず、必修3で視点を定め、論拠を選んで論証するという議論の基本と基本的な項目と、記述の注意点を学び、必修4の前半で議論の展開方法を学ぶ。そして、必修4の後半から必修5で、反論や精緻な分析をすることを通じて、さらに考えを確立することを学ぶことになる。

表1 日本の教科書における意見の述べ方の指導(意見文・小論文)

①『高等学校 国語総合』 (第一学習社)	②『精選国語総合』 (三省堂)	③『精選国語総合』 (東京書籍)
<p>*現代文編は、評論・小説・詩・随想などの読み物と、表現の実践に分かれている。表現の実践に9つの項目があり、8つめに意見文が取り上げられている。</p> <p>表現の実践8 意見を述べる</p> <p><教材> 「ODAの必要性」と題した文</p> <p><意見文の書き方></p> <p>1. テーマを見つける。 日ごろから新聞やニュースなどに広く目を配り、さまざまな問題に関心を向けておく。</p> <p>2. 取材する。 具体的な体験や信頼性のある資料、客観的なデータを集める。予想される反対意見への反証材料にも目を向けて取材する。</p> <p>3. 主題文をまとめ、構成を考える。 頭括型：(問題提起+) 結論+根拠 尾括型：問題提起+根拠+結論 双括型：(問題提起+) 結論+根拠+結論 (短い文章や口頭での意見発表では、頭括型か双括型が効果的。)</p> <p>4. 記述・推敲する。 冗長な表現は避ける。本文と引用箇所を区別する。</p> <p><課題> ODAの必要性、環境問題、マナーの乱れ、高齢社会からテーマを選び、600字程度の意見文を書く。</p>	<p>*現代文編は、評論・小説・詩・随想などの読み物と、表現とに分かれている。読み物の中に「読解から表現へ」として、読後に表現活動が入るものがあり、その9つめに小論文が取り上げられている。また、表現に10の項目があり、8つめに意見文が取り上げられている。</p> <p>読解から表現へ9 小論文を書く</p> <p><小論文の書き方></p> <p>1. 最も言いたいことを決める。</p> <p>2. 書き出し……第1段 定義・体験・身近な話題・引用で始める。結論を初めに示す。</p> <p>3. 状況を分析する。……第2段 どのような問題点があるか。どうして生じたのか。</p> <p>4. 意見を展開する。……第3段 複数の根拠をあげる。オリジナリティーを展開する。</p> <p>5. 結論……第4段</p> <p><課題> 少子化についての意見を800字以内で書く。</p> <p>表現8 意見文を書く</p> <p><教材> 新聞の投書「募金 できれば涼しい駅構内で」</p> <p><投書を書くためのポイント></p> <p>1. 書き手の立場を明確に示す</p> <p>2. 意見は主張が明確で、しかも客観性をもっている</p> <p>3. 意見や主張を支えるだけの事実や体験を提示する</p> <p>4. わかりやすい文章を心がける</p> <p>5. 内容にふさわしい題をつける</p> <p><課題> 新聞社に実際に投書をしてみる。</p>	<p>*現代文編は、評論・小説・詩・随想などの読み物と、言語活動編に分かれている。言語活動編に8つの項目があり、5つめに意見文が取り上げられている。</p> <p>言語活動編5 意見文を書く</p> <p><意見文の書き方></p> <p>1. 自分で問題を決める意見文の書き方を理解する。</p> <p>(1) 取り上げる問題を設定する。</p> <p>(2) 取り上げる問題について検討し、自分の意見を持つ。 自らの生活体験や、収集した情報をもとに検討する。</p> <p>(3) 意見の根拠について確認する。 客観的な事実か。信頼性のある情報か。独りよがりでないか。 複数の根拠を示したり、反論を想定したりする。</p> <p>(4) 文章の構成を工夫して、意見文を書く。 序論：問題提起(取り上げる問題・自分の考え) 本論：根拠・理由①、根拠・理由②…(資料の引用・反論)</p> <p>まとめ</p> <p>2. 与えられた課題に対する意見文の書き方を理解する。</p> <p>(1) 筆者の見解を的確に読み取る。</p> <p>(2) 筆者の見解に対して、自分の意見を書く。</p> <p>3. 推敲して清書する。</p> <p>4. 評価表(問題提起は明確か、事実と意見、引用は区別されているか等)を使って、話し合う。</p> <p><教材> 茂木健一郎『「脳」整理法』とその要約および意見文の例</p> <p><課題> 最近の新聞の記事や教科書に掲載の評論「時間と自由の関係について」の一部を読み、自分の意見を書く。</p>

表2 中国の教科書における意見の述べ方の指導（議論文）

	話題の研究、書き方の参考		作文練習のための材料、テーマ、題
	教材(文章、トピック等)	学習内容	
必修 3	思考に勤めよう<立論の視点の選択>		
	<ul style="list-style-type: none"> 文章「物事の正解は一つではない」 鲁迅「祝福」「故郷」 寓話「濫竽充数」 各種の諺、故事成語、格言 「香菱の詩歌学習」(『紅樓夢』より抜粋) トピック：カンニングが多発する原因 	<ul style="list-style-type: none"> 視点が違えば、見えてくるものも違うことを学ぶ。 複数の視点から考える。 通常とは別の角度から考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 詩「理想」 古代ギリシアの哲学者に関する短文 「よく吠えるからといってよい犬とは言えない、よく話すからといって賢人とは言えない」(『莊子』「除無鬼」による) 題：最も遠い距離 テーマ：道家の水に関する思想
	寛容でいよう<論拠の選択と使用>		
<ul style="list-style-type: none"> 孔子とイエス・キリストの物語 読書推奨：『論語』(「恕」について)、韓愈「原毀」、ヴァン・ルーレン『寛容』 トピック：身近にあるトラブル 尹栄方「度量論」 鲁迅「中国人は自信を失ったのか」 韓愈「師説」など 	<ul style="list-style-type: none"> 寛容精神について考える。 文章に示された見方・考え方がどのような論拠(理論的、あるいは事例的)に支えられているか、考える 論拠の使い方と選び方を考える(関連性があるか、代表的なものであるか、新しくユニークなものであるか)。 	<ul style="list-style-type: none"> 題：寛容について 馬に関する寓話 世界を分裂した家庭に喩えた短文 小中高の生徒向けのアンケート調査「嫌いな人から助けを求めてきた、あなたには助ける能力がある、という場合、あなたは助けるか」 「度量論」の中の言葉 	
生命を大切に<論証>			
<ul style="list-style-type: none"> オストロフスキー『鋼鉄はいかに鍛えられたか』 ラッセルの自伝「私は何のために生きてきたか」 杏林子「生命 生命」 俞敏洪『生命は清い水の如く』 韓愈「師説」、賈誼「過秦論」、荀況「勸学」 	<ul style="list-style-type: none"> 生命を考える観点にはどんなものがあるか検討する。 生命に関する物語を集め、整理し、分析する。 「生命 生命」『生命は清い水の如く』を読んで、いかに論証をするか考える(「自らの心臓の鼓動を聞いた」という典型的な事例を用いた事例論証法、「生命は清い水の如く」といった比喩論証法、詩歌や名言、名句を引用して見方・考え方を示した引証法、二つ以上の異なる事物を比較した対比法)。 	<ul style="list-style-type: none"> 古代ギリシアの恋の悲劇→テーマ：命の灯台 文学批評「人間詞話」→題：命の三つの境地 ヘレン・ケラー「もし三日間目が見えたら」→テーマ：持っているものを大切に テーマ：誰の命の質がより高いか。パーベル・コルチャーギンか、ビル・ゲイツか。 テーマ：絶望したり、厭世・自害の念を持ったりした生徒に、生命を大切に、生活を愛するよう説く。 	

	愛の奉仕＜議論の中の記叙＞		
	<ul style="list-style-type: none"> ・陳思和他編『思いやりについて』より編集 ・トピック：愛の力 ・読書推奨：ユーゴー『レ・ミゼラブル』、王統照『ほほえみ』 ・毛沢東「ベチューンを偲ぶ」 ・盧錦燕「修道女マザーテレサ」 ・エンゲルス「マルクスの墓の前でのスピーチ」 	<ul style="list-style-type: none"> ・文学作品から愛の力を考える。 ・意見文における記叙の役割や特徴を分析する（議論のきっかけ、事件・人物の背景説明を簡潔で概略的に書く）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマ：愛とは何か ・テーマ：平凡な生活の中の愛 ・題：「漢詩『安得廣廈千萬間』から話を広げて」 ・気がかりに関する短文→テーマ：気がかり ・パラリンピックに関する短文→テーマ：手を引きあって
必修 4	時間を読み解こう＜横に広がる議論＞		
	<ul style="list-style-type: none"> ・時間に関する詩文、格言、名言 ・何為「時間論」 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間に関する詩文について考える。 ・「時間論」で示された見方・考え方について、複数の視点から議論することを学ぶ。それぞれの視点からの議論は、互いに並列関係にあり、交差しない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマ：時計の外の時間 ・人生の時間的支出に関する短文→題：「人生の時間的支出」についての所感 ・「人生は時計の如く、完璧さは早く走るのではなく、正しく歩むことにある」という言葉が添えられた絵 ・時間の使い方に関する短文 ・題：速いこととゆっくりであること
	幸せを見つけよう＜縦に展開する議論＞		
<ul style="list-style-type: none"> ・パークレイ『幸福』 ・謝冕「読書人は幸せな人」 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章に示された幸福について考える。 ・「読書人は幸せな人」の論理展開や各視点の関係、順序を考える。逐次、議論が深まることを理解する。 ・「勸学」（『荀子』）、「師説」に見られる論理の展開を分析する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・鬼と天使に関する寓話→題：幸せはどこから来るか ・ソクラテスの楽しみとは何かについての文章、ニューヨークの老婦人の苦難観に関する文章 ・絵にある染みに関する短文 ・「幸せ指数」のアンケート調査を行う→テーマ：その結果について 	
自信を確立しよう＜反論＞			
<ul style="list-style-type: none"> ・ローゼンタール効果 ・魯迅「中国人は自信を失ったのか」 	<ul style="list-style-type: none"> ・自信を持つことの大切さを考える。 ・文章中で、どのように反論がなされているかを考える（直接に反論、論拠が虚偽であると指摘、論拠と論点がつかまらないことの指摘など）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・蜘蛛の失敗→題：「挫折しても緩まずに堅持すべき」あるいは「挫折したら選択し直すべき」という立場での弁論 ・助かろうとしないカエルと助かろうとしたカエルがともに死んだという文章 ・アイドル崇拜についての文章 ・小沢征爾の堅持が自信か、固執かに関する短文 ・外国人に席を譲る行為の是非に関する文章 	

思考に習熟しよう<弁証的分析>		
<ul style="list-style-type: none"> 元三「君子は義も利も大切にす」より抜粋 	<ul style="list-style-type: none"> 分析が一面的にならずバランスが取れていること、問題を静止的ではなく発展的にみること、事物が一定の条件下では逆の方へ変化することがあることに留意する。 文章の筆者が示す考察に賛同するか否か、考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 故事→題：一つの部屋の掃除と天下の掃除 鷹の真似をするカラスに関する文章 テーマ：子どもに自由を与えること 相矛盾するような格言、諺→テーマ：中国の文化 題：人と道
事実に基づいて論理を分析しよう<深めて書く>		
必修5 <ul style="list-style-type: none"> 『韓非子・喻老篇』 魯迅『且介亭雜文二集』 巖保林「郭沫若の成績表」 王安石「遊褒禪山記」 	<ul style="list-style-type: none"> 道理の発見の方法を探る（小を以て大を見る、比較・区別をする、表面から深層へ迫る、因果関係を探究する）。 	<ul style="list-style-type: none"> テーマ：ある流行の現状とその発生の根源、今後の発展趨勢 題：大自然からの示唆 『チーズはどこへ消えた』 リンカーンの手紙→テーマ：石と山頂 孔子にまつわる文章

5.2 文章の構成に関わるもの

文章全体の構成について日本の教科書3つに共通するのは、結論としての意見を明確にしてから根拠や理由を述べるということが推奨されるという点である。教科書①では、頭括型、尾括型、双括型の3つの型が示され、短い文章では頭括型か双括型が望ましいとされる。また、②では、書き出しとして、定義や体験等で始めることに加え、結論を初めに示すことが挙げられる。③では、序論、本論、まとめという枠組みが示され、序論の問題提起として「取り上げる問題」と「自分の考え」が挙げられている。

一方、中国の教科書では、文章全体の構造が明示されている箇所はない。そこで、議論の展開方法を学ぶ必修4の「時間を読み解こう<横に広がる議論>」、「幸せを見つけよう<縦に展開する議論>」という単元で書き方の参考として掲載されている文章「時間論」と「読書人は幸せな人」の構成を見てみる。「時間論」は、「最近、時間のことをよく考える」と始まり、複数の視点からの時間に関する議論を経て、「時間を浪費すべきでない」という結論に至る。「読書人は幸せな人」は、「読書人が幸せな人であるのは、現実の世界の外にもっと広く豊かな世界を持つからだ」と始まり、その後の各段落では、前段落で書かれたことを受けて議論を発展させ、最後に「だから読書人は幸福だと言うのだ」と述べる。これらの文章は、それぞれ、「時間」というテーマ、「読書人は幸せな人」という読書に関する視点が最初に示され、議論を経てまとめに至っていると解釈される。日本でまず意見を明確にすることが求められるのに対して、中国では、テーマや視点を導入し、議論を経て意見を述べるという構成が示されるのである。

5.3 論拠・根拠・理由の示し方に関わるもの

日本の教科書では、②と③で、「複数の根拠を挙げる」「根拠・理由①、根拠・理由②」という記述があり、根拠・理由を複数挙げるということが推奨されている。また、根拠・理由

として、③では資料を引用することや想定される反論に言及するという方法が示されている。予想される反論については、①でも触れられている。資料を引用したり、予想される反論にさらに反論したりしながら複数の根拠を挙げて論じていくわけであり、論の構成は複雑なものとなる。根拠や理由としてどのようなものを選ぶかについては、①に具体的な体験、信頼性のある資料、客観的なデータが挙げられている。

中国の教科書では、必修3の「寛容でいよう<論拠の選択と使用>」「生命を大切に<論証>」において、論拠を用いて論証することを学ぶ。論証の方法として、事例論証法、比喩論証法、引証法、対比法が挙げられるが、このうち、比喩論証法は文章技巧による論証、引証法は有名な史実や名言による論証であり、日本の教科書では見られないものである。必修4の「時間を読み解こう<横に広がる議論>」「幸せを見つけよう<縦に展開する議論>」で、議論を発展させることを学ぶ。横に広がる議論では、複数の視点から平行して展開し、互いに交差しない議論がよいとされる。書き方の参考として扱われる「時間論」は、前節で見たように、複数の視点からの時間に関して議論が列挙されるが、それらが互いに関連しあうことはない。また、縦に展開する議論の教材となる「読書人は幸せな人」では、各段落で、前段落で書かれたことを受けて議論を発展させる。これは、表面から内面へ、浅いことから深いことへというように、一方向に論が展開していくというものである。

なお、中国の教科書の必修4に「自信を確立しよう<反論>」という単元があるが、これは、他者の言説に反論することを学ぶことにより思考を深めようというものである。日本の教科書でいう反論が、予想される反論を想定して、それにさらに反論することにより自分の意見を補強しようというものであるのとは異なっている。

5.4 表現の特徴に関わるもの

日本では、教科書①に表現に関することとして、冗長な表現は避ける、本文と引用箇所を区別するという注意点が記載されている。また、教科書③の評価表の中に、事実と意見、引用の区別についての言及がある。

中国の教科書に特徴的な学習内容として、必修3の「愛の奉仕<議論の中にある記叙>」がある。鄭(2018:1)によると、中国には記叙文という文種があり、それは、記述や叙述の表現手法を用いた文種で、人物を描写する文章と事件を記述する文章に分けられ、前者には、外見や対話、心理の描写などが含まれ、後者には、時間、場所、人物、事件の原因などが含まれるという。ここでは、議論文の中の記叙であり、記叙文とは異なるが、意見を述べる中で記叙の要素が含まれることは、表現のスタイルに影響を及ぼすと考えられる。表現としては、簡潔で概略的であることが求められる。

ここでさらに、教材の比較をしたい。どのような教材を用い、何について意見を述べるかは、文章のスタイルや表現に影響があると思われるからである。

日本の教科書①ではODAに関する文章、②では新聞の投書、③では『「脳」整理法』という書籍の一節が取り上げられており、現代社会の問題や科学的知見をもとにした

文章が教材となっている。

それに対し、中国では、寛容、愛、幸福といった観念的、情感的で抽象的なトピックが多く、詩歌や小説といった文学作品、古典などがしばしば教材として提示される。日本では、文学を鑑賞することと論理立てて考えることは、分けて扱われることが多いが、中国では、文学や古典を教材とし、観念、情感に関して、論理を整え、意見の述べ方を学ぶわけである。

6. おわりに

教科書に見られた差異は、先行研究で示された日中の差異に通じるものが多いように思われる。大野(2019)は学生が身に付けた書き方として日本では主張—論拠—主張が多く、中国では主題—論拠—主張が多いとしたが、日本の教科書ではまず結論を明確にすることが推奨され、中国の教科書ではテーマや視点を提示して議論を展開し、結論に至るといふ文章が示されることと相通じるものがある。論証のしかたについては、前川(2019)が日本ではツリー構造が多層化するが中国ではそうでないことを指摘したが、日本の教科書では資料の引用や想定される反論を含んだ論の展開が、中国の教科書では複数の視点からの平行の議論や一方向的に深まる議論が示されることを思えば、ツリー構造にそうした違いが出てくることは自然な帰結のように思われる。また、中国では論拠として史実や名言・箴言が多用されることは、論証の方法として事例論証法、引証法が示されること、教材として古典を含む文学作品が多く用いられることと関連するだろう。表現については、教科書で述べられる簡潔にという注意点が日中で共通しているが、中国の教科書で文学を教材として観念的、情感的なトピックがしばしば扱われること、また、意見を述べる中に記叙が含まれることは、肖(2021)のいう、濃厚な感情の文や叙情的な表現につながる可能性がある。

本稿では、先行研究で示された意見の述べ方の特徴を切り口として教科書に書かれていることを比較した。その中には、文章を書くにあたっての注意といえるものもあれば、考えること、自他の文章を見直し評価することといった活動の指針といえるものもある。本稿では、これらを並列して挙げていったが、それぞれについて改めて検討する必要があるだろう。また、何を教材とするかという問題は、表現に影響があるだけでなく、古典を含む文学から何を学ぶか、論理を考えるとはどういうことかなどといった国語教育、作文教育の目標に関わるものである。意見を述べることの位置づけを含め、より包括的に、詳細に考察することが今後の課題である。

注

- 1) 文化庁HPに、日本語教育実態調査が掲載されている (https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/index.html 2021年12月13日参照)。
- 2) 日本国語教育学会編(2011:306-315)では、理由を示して主張を書く文章を「意見

文・小論文」として解説するなど、必ずしも両者が区別されるわけではない。

- 3) 中国では、「普通高等学校招生全国统一考试」、通称、「高考」と呼ばれる。国語の問題には、800字程度の作文が含まれる。
- 4) 中国では、日本の高校にあたる学校を高級中学、日本の国語にあたる教科を「語文（语文）」と呼ぶ。
- 5) 課程標準は、日本の学習指導要領にあたる。
- 6) 内外教育編集部編（2016：60-63）参照。なお、1社が複数種類発行する場合、通常、基礎を固めることを主眼としたものと、より発展的な内容を含むものが発行されている。本研究では、後者を分析の対象とした。

付記：本研究は、JSPS 科研費 19K00717 の助成を受けたものである。

謝辞：本研究は、第 141 回全国大学国語教育学会世田谷大会における発表を発展させたものである。ここに、有益なご指摘をくださった参加者の方々への謝意を表する。

参考文献

- 大野早苗・莊嚴（2016）「インタビュー調査からみる中国人留学生が母国の学校教育で学んだ文章の書き方について—作文参考書の利用を中心として—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』8, 74-82.
- 大野早苗（2019）「日本人学生と中国人学生の母語による意見文の構成の違い」『月刊国語教育研究』564, 42-49.
- 肖宇彤（2021）「意見文における中国人日本語学習者の文章観についての一考察—中国の議論文に焦点を当てて—」『名古屋大学人文学フォーラム』4, 437-452.
- 鄭友霄（2018）「中国における作文指導」『人文科教育研究』45, 1-5.
- 内外教育編集部編（2016）『データで読む教育 2015～2016 調査・統計解説集』時事通信社
- 日本国語教育学会編（2011）『国語教育総合辞典』朝倉書店
- 前川孝子（2020a）「中国人日本語学習者は意見文をどのようにとらえているか—中国での質問紙調査から—」『日本語教育方法研究会誌』26(2), 72-73.
- 前川孝子（2020b）「日本の小論文と中国の議論文における論拠の特徴」『表現研究』111, 31-40.
- 渡辺雅子（2007）「日・米・仏の国語教育を読み解く—「読み書き」の歴史社会的考察」『日本研究』35, 573-619.

大野早苗（順天堂大学）・莊嚴（秀明大学）